

文化映画

紹介

渡部実

「思わぬ火もと ～高齢社会・増え続けている電気火災～」映学社作品

「飲酒運転が人生を狂わせた 受刑者と遺言の悲痛な叫び」映学社作品

「探偵アイちゃん“細胞”博士を知る ～はじめて出会うミクロの世界～」アイカム作品

思わぬ火もと
～高齢社会・増え続けている電気火災～

【スタッフ】製作統括・監督／高木裕己 撮影／松尾研一 脚本・演出補／阿部伸太郎 選曲／YOKA ナレーター／集祐子 イラスト／正者章子 監修／関沢愛（東京大学大学院工学系研究科教授・工学博士） 映像協力／NHK、総務省消防庁消防大学校消防研究センター、米国商務省標準技術研究所（NIST） 撮影協力／（独）製品評価技術基盤機構、仙台市消防局仙台市青葉消防署、仙台市若林区南小泉北部連合町内会、日本医科大学法医学教室 完成／08年 ビデオ・20分

【内容】火災は何時、どのような状態で発生するか分からない。特に住宅地の火災は私たちの生活の場所であるだけに深刻である。この映画は今も頻繁に起こる住宅火災について、特にその原因となる一人暮らしの高齢者の住居環境と、市民も日常使っている電気コードの漏電による火災への実例を紹介し、広く市民社会での住宅火災の危険性を警告している。高齢者に着目したのは、年間1千人を越える火災の死者のうち、6割近くを65歳以上の高齢者が占めている事実による。その死因の首位は高齢者の逃げ遅れ。高齢になると身体能力の低下により、火災や煙に気付きにくくなる。そこから逃げ遅れの悲劇が生まれる。そしてまた、高齢者も身近に使う配線器具の電気コード。その危険性についても指摘する。電気コードによる漏電は老若男女を問わず、いつも注意を払うべきである。映画はそれらへの危険な例を数々の実験によって紹介する。たこ足配線、家具の下敷きになったコードのもろさ、などは意外にも安全と思われるだけに火災の盲点ともいえる。さらに室内での煙りの広がり方の実験なども紹介する。

かねてより映学社は雑居ビルの火災の発生の原因を指摘するなど、防災をテーマにした作品で定評がある。何よりも実験を見せることによって火災の恐ろしさを科学的にも証明している点が強力。説得力のある作品である。

【スタッフ】企画・製作・監督／高木裕己 撮影／松尾研一 音楽／加藤由美子 演出補／阿部伸太郎 CG 映像／佐々木工房 ナレーター／桐山ゆみ 協力／市原刑務所 完成／08年 ビデオ・25分

【内容】続いては飲酒運転による事故への危険性を警告した作品である。近年、飲酒運転による交通事故がかなりの頻度でニュース、新聞等で取り上げられるようになった。それに伴い、飲酒運転の罰則も強化され、飲酒事故が発生した場合、アルコールを当事者に勧めた関係者、飲食店も罰則の対象になるという厳しい時代に変わってしまった。現実には交通事故は起こった。死者を出してしまった。この

事実は覆せない。そこで映画は事故を起こしてしまい、今は刑務所に服役中の受刑者たちに取材を試みる。

この取材は難しいと思われるが、よく敢行した。交通刑務所の受刑者は、もとが根っからの犯罪者ではないので、取材にもおとなしく応じてくれる。その数人の受刑者に共通した意見と考えば、等しく、アルコールの摂取への過信というものである。「これぐらいの酒ならば、大丈夫だろう」とその気持ちが間違っていたという。確かにそれは事実であるが、事故の経験の無い者からみれば、それはいささか実感として分からないものかも知れない。しかし、この取材に際してくれた受刑者たちは反省もふくめて淡々とその思いを語るもので、これはもしかしたら、何かそこに事故にいたる真実があるのではないかと、とさえ思ってしまう。取材が効力を発揮した例である。次に映画は事故の遺族たちにも取材をする。事故は一瞬にして起こる。その一

瞬に身内の人間の命が奪われたことを未だに納得できない遺族の戸惑いが印象的である。前作の火災の場合も、死者を出してしまう本編の交通事故も、当事者たちは事故の前までは普通の市民である。その市民生活に一人一人の後半生や人生を狂わせてしまう火災と事故。具体的な実験と取材によってその恐ろしさが直に伝わる2本の力作であった。(以上2作品の間合せ) 映学社 TEL031335919729)

探偵アイちゃん「細胞」博士 会うミクロの世界

【スタッフ】監督・構成／武田純一郎 「本の製作」製作／武田遊 文／堤愛子 絵・装丁・DTP／小林架寿恵 撮影／岡田学 「DVD製作」企画／中外製薬学術アドバイザー／鈴木洋史(東京大学教授・医学部付属病院薬剤部長)、辻勉(星薬科大学教授) 製作／長谷川高久、桑原奈奈 脚本・編集／川村智子 編

集助手／窪田真澄 撮影／武田遊、北原幸夫、林正浩 実験研究・SEM／貞方久人、石崎美知子 キャラクター・デザイン／春日出朝 Mitsui Bio Imaging／永田雅己、大場健嗣、寺山いずみ 音楽／宮川進 ナレーター／増岡弘、中川重紀子 制作デスク／藤泰行、伊藤きよみ 発行者／川村智子 完成／07年 本・48ページ DVD・12分



「探偵アイちゃん」細胞博士を知る

【内容】おわりに紹介するのはDVDブックという新しいスタイルの媒体である。このブックには題名の「探偵アイちゃん」細胞博士を知るのとおり、小学生の女の子アイちゃんが、隣りに住むおじさんの家に招待をされて、自然界の生物を作っている細胞のことを教わるという内容である。

はじめ、アイちゃんにとっては正体不明で家で何をしているのか分からなかったおじさんが、実は北の丸博士という生物の学者で、幼いアイちゃんに細胞のことを図解を入れて詳しく教えてくれる。

まず絵本として導入部がよく出来ており、その興味を喚起させる展開の中に目のレンズの細胞、血液の細胞(赤血球)、心臓の細胞などがカラー写真で紹介される。しかもこれらの映像が私たち大人が見ても興味を引くのは、顕微鏡撮影で捉えられた色々な細胞が発見の面白さと魅力に満ちているからである。細胞に興味を抱いたアイちゃんの様子を見て、博士はその興味を高度な次元に一気に引き上げる。細胞を知るというテーマを基に絵本のやさしい言葉の中に、細胞膜、核、ミトコンドリア、DN

A、染色体、といった言葉がアイちゃんの知りつつある理解の速度とともに、ゆっくりと紹介される。これは大人が読んでも魅了される絵本である。絵本のおわりには博士からアイちゃんへの手紙という形で台所にある身近な食品、食器からDNAを取り出してみよう」という理科の実験の付録がついているところも楽しい。

一方、映像のDVD作品は顕微鏡撮影を駆使しての細胞の中の世界を紹介し、「くすり」「バイオ」「がん」といった3部構成の12分の展開になっている。もともとは製薬会社の展示ブースをブックにも応用、発展させたものであるが、活字と顕微鏡撮影などの映像を組み合わせて見ることで、読者(観客)は相乗効果による予想外の知見を得ることができよう。親子にも配慮の行き届いた良心的なDVDブックとして広く薦められる作品である。(間合せ) アイカム TEL0313396019611)